

実践論文

に向けた難波からのコメント

■青木睦子「本質的な問いから考える単元カリキュラムの構想—読んで考えたことを伝えよう「ごんぎつね」ようこそ新美南吉の世界へ—」

本論考の実践は、問いづくり、教科領域横断、カリキュラムマネジメント、ICT、言語活動、協働学習、そして実の場としての新美南吉博物館、これらのコンセプトが無理なく見事につながっている。児童の「このおはなしのおもしろさはなにだろう」という問いとその答えがまちがいなく玉の緒となり原動力となっている。読書指導も、クイズも、読み聞かせも、全て無理なく入っている。青木氏と児童は、協働で＜世界＞を創造したのだ。

■稲田八穂「子どもの事実と向き合う授業づくりの可能性—教師サポーターとして—」

抜け出す、トランプをやる、さわぐ。そういう教室の学習者に、国語教育ができることを考えるのが研究者である。それができないなら、研究者をやめるか、文学か語学の研究者になればよい。サポートをしなくてもサポートの理論生成と現実への応用ステップを考えなければならない。さらに、教育サポーターには、疲弊する教員を、支配しコントロールするのではなく、支え続ける姿勢を持つことが求められる。本論考にはこの全てがある。

■岡田真範「三島由紀夫「美神」の授業、2020」

視覚障害が進み視野がどんどん狭くなる生徒にとって、岡田氏の実践は「ただ楽しかった」という。ここにこそ文学教材の実践の意義がある。「生きいくための文学」に学習者が出会うこと、そのための最善の手伝いを私たちはしなければならない。人間の懊悩、煩悩、愉楽などに、公然と出会い公然と語り合うことができるのが国語科の時間である。そのための「しつらえ」をどう作るか、本論考にはそのヒントが無数に散りばめられている。

■近藤秀子「多様な読みを認め合う問いと学習デザインの検討—絵本「おおきな木」を教材に（大学院生・中学生・小学生対象）—」

物語や小説を自由に読み交流する授業ができればと教師たちは思う。しかし、外と内から束縛されなかなかできない。その束縛を取り除くのが授業の「しつらえ」である。本論考では、「原作と複数の翻訳」という教材の「しつらえ」と段階を踏んだ問いの連続という「しつらえ」がそれにあたる。翻訳の違いに気づかせることで、見えなかったことが問いになる実践であった。さらに翻訳というアダプテーションに注目した実践に注目したい。

■佐々木渚・北野麻未「書くことを楽しむ作文指導の実践—特別な支援を必要とする子どもたちへ—」

論考にある A 児のアンケートの文字は、国語の授業へのうらみがみえる。教育はこれほどまでに子どもへの害となることがある。その「恨みの重なり」を崩し、勉強の面白さへとつなげていく、本論考の題目が「書くことを楽しむ」ことを目標としていることの眼目はそれである。空想作文という題材、教師との受容的なやり取り、プリント、学習者に合ったテーマ、これらの「しつらえ」が、A 児に自信と喜びをもたらす作文を書かせたのだ。

■重永和馬「問い作りの授業実践と考察—高校2年生の現代文と古典での実践を中心に—」

問いづくり（なぞづくり）から始まる授業実践は難波も広げたい方法としているものである。本論考では、重永氏が中高で取り組んでいる問いづくりのうちの「はじめの問いづくり」に焦点を当てたものである。そ

の分析によれば、文学や古漢文は「内容面の問い」が多く、説明文（評論文）の場合は、「（現実はどうか）などの発展的な問い」が多いとしている。また、問いづくりの留意点も示されており、続報が待たれるものとなっている。

■妹尾知昭「大学初年次における質的研究法を取り入れたレポート作成指導—自身のライティング教育実践を踏まえて—」

本論考には、妹尾氏の14年間741本のレポート指導の蓄積が反映している。自分の文章がお手本の文章よりも劣っていることを必要以上に意識するという指摘は、あらゆる校種の書くこと教育につながる。書くことを質的研究とみなす切り口も参考になる。論題も自由にせず「病」と広く与えたところは、随意選題論争に一石を投じるだろう。このテーマは、書き手をゆさぶり、取材を本気にさせ、長文を書かせる原動力になるからである。

■田中智也「「譲れない読み」を発見するための詩教育の実践—誤読を恐れない立場をとって—」

田中氏は詩教育で「生きることのリアリティー」を創造するために「譲れない読み」を学習者自身が見つけることを目指した。そのために「気づき」→「自分なりの読み」→「他者との交流」→「譲れない読み」という課程を作った。しかも、実際の実践では、自分の「譲れない読み」を他者にガイドし、自分が空想空間で見ているものを他者にも共同注視する言語活動が示された。切実な言語活動こそが、大きな学びことを生むことを示した。

■原田啓「主体的な学びに向けた実践研究—学習者がループリックを作成する活動を通して—」

ループリックが、教師には負担感を、学習者には無力感をもたらす現状がある。原田氏はその状況を打破し学習者の学びに真に寄与できるようなループリックの実践を積み重ねている。本論考では、新聞づくりの実践に盛り込むことで、ループリックを作ることが新聞づくりにダイレクトに生かされる実感をもたらすとともに、他者へのアドバイスにも意味をもたらした。学習としてだけでなく「実の場」にも生きるループリックの実践である。

■古田菜津子「生きる力を育むための国語科学習指導をあきらめないために—自分自身に問い直しを—」

卒業論文で「大村はまはいかに大村はまになったか」を書いた古田（青木）氏は、「教師になる」ということにずっと関心を持っている。本論考は、大村はまの218ものフレーズを足場に、「海の命」の実践を「批判的に、素直に」振り返ったものである。迷いながら向き合う教師の前で、子どもたちの声が広がる姿がありありとみえる。授業技能を磨きながら、子どもたちと学ぶ態度をすり減らさず、一緒に成長する価値に向かっている。

■本渡葵「保育学生への卒業研究指導実践に関する事例検討」

「卒業研究」指導の研究は、全大学教員が参照すべきものであり、関心も高いはずである。しかし、本渡氏が指摘するように研究が少ない。その点でも本論考は貴重なものと言える。全体ゼミと個別ゼミの組み合わせ、発表会や計画書作成が研究を進めること、実習などによる「保留」からの復帰の難しさなど、いずれも私自身の実践経験と重なる。この論考に見られる、「学生に寄り添い思いを引き出し方向づける」実践から学ぶことは多い。

■山田和大「資質・能力ベースの授業における教材研究の重要性—諸葛亮「出師表」を中心に—」

目標から（あるいは育てるべき資質・能力から）授業を考えるためには「教材研究を深めていく」必要があることを山田氏は指摘する。具体例として本論考では、諸葛亮「出師表」が取り上げられ、「三国志」「十

八史略」「蒙求」各々の「出師表」の語り方が、どのような書き手の見方・考え方の反映かを考える単元を構想した。最後には学習者の探究課題も付せられている。ここに、やってみたい、面白いと思わせる漢文単元が爆誕している。

■山田深雪「国語科教員として必要な思想を構築するために教員養成段階にて為すことは何か―教員および学生の国語に対する〈無意識的な観念〉の分析を通して―」

教員養成は教員の「無意識の観念」が良くも悪くも学生の「無意識の観念」に作用する場である。また学生の「無意識の観念」がその作用の方向性や力を左右する。国語教育を「継承の場」と考えると、このような「無意識の観念」「作用」に自覚的でなければならない。野地先生を始めとする国語教育の先達が「教師の自覚」を重視したゆえんである。山田氏が追究する〈寛容〉は、この「自覚」の上に立つものであることを私は再確認した。

■吉川将弘「国語の授業で ICT をどのように活用するか―継続的な活用を通しての目標や課題―」

高校の一年間を通した ICT 国語科実践の記録である。生徒たちが古文助動詞の解説動画やテスト、現代語訳を ICT を利用して作る、自分の意見に他者の意見を色分けして組み込むところなどに、「学びの大きな可能性」が見られる。これらは、「創作/表現―自らテキストを編む」という単元学習でも目指されたことであることに注目したい。ただ吉川氏は「本質的な意味での自立性を与えた」実感はないと述べる。それはなにか考えたい。